古典落語に学ぶ

落語家
立川談四楼

第四十七回　庭蟹

お宅の番頭さんは洒落（しゃれ）の名人だと言われた旦那は、早速番頭を呼び、何か洒落を言ってくれと頼む。番頭が題を出してくださいと言うと、旦那は踏み台を出してきた。「台ではなく題です」と番頭が苦笑い。ようやく理解した旦那はそばにあった「衝立（ついたて）」で題を出した。

番頭はたちどころに「一日（ついたて）、二日、三日」と洒落たのだが、旦那は反応無し。あろうことか「三日、四日、五日では駄目なのかい」などと言い、まったく洒落が通じない。そこへ小僧の定吉が五十円のいんげん豆を買ってきた。「ではいんげん豆で洒落を言っとくれ」「いんげん（人間）わずか五十円（五十年）」。すると旦那は「わずか五十円とはなんだ！商人は一円たりとも大切にしなければ出世しないんだぞ」と小言を言い出す始末。

旦那が庭を見ると蟹（かに）が這（は）っている。孫が縁日で買った蟹がいなくなったと言ってたから、あれかもしれない。「番頭さん、あの蟹で洒落とくれ」。番頭さんは洒落の分からない旦那からはもういい加減に逃げ出したかったが、仕方なくこう洒落る。「にわかに（庭蟹）は洒落られません」と。すると旦那「いや、急いで洒落なくてもいいんだ。ゆっくり洒落なさい」とまたもや取りつく島もない。それでも旦那は諦めず、傍

らの請求書を指さして、「今度はこれで洒落てみなさい」。

もはや番頭さんは半ば絶望していたが、それでも「性急（請求）には洒落られません」と答える。すると旦那は怒り出す始末。「なんだ、洒落の名人と聞いたからせっかく洒落させようと思ったのに、ちっとも洒落ないじゃないか。不愉快だから向こうへ行っとくれ」。ああやれやれと番頭さんは店に戻ります。

二人のやりとりを見ていた定吉は大笑いです。洒落の名人である番頭と、まったく洒落を解さない旦那を比べ、腹を抱えて笑ったのです。旦那の機嫌のよさそうなところを見計らい、定吉は旦那にさっきの番頭の洒落を丁寧に解説しました。しかし旦那は「言葉が掛かってるのは分かるけど、それがなぜ面白いのか分からない」と、頭の固いところを全開にします。それでも番頭にすまないことをしたという思いはあるようで、再び番頭を呼びます。番頭は渋々と旦那の前に座ります。

「番頭さん、もう一度だけ洒落を言っとくれ。それを私が褒（ほ）めるから、それでおしまいにしようじゃないか」

「そうおっしゃられてもすぐには洒落は出ません」

「うーん、上手（うま）い洒落だ」

これが『庭蟹』です。小噺（こばなし）に毛の生えたような落語ですが、よくウケます。番頭なのか旦那かはわかりませんが、お客さんたちにはそれぞれ、あ、こういう人、いるいると思い当たる節があるんでしょうね。あの人のことだと。

世の中は洒落の上手い人と、洒落を解さない人がいて成立しています。洒落が分からないのは罪ではありません。そういう人もいるというだけのことです。でも、もう少し洒落を分かってくれてもいいのではという人はいますね。そうなれば会話も弾むし、楽しいひとときになるわけですから。

洒落と言っても『庭蟹』では、番頭さんの口から出るのはいわゆる「駄洒落（ダジャレ）」です。ダジャレのコツを教えてほしいと私に聞く人もいます。親しい人との会話の中で自然に出るのが理想ですが、やはり少々の訓練が必要でしょう。場数ですね。そんなとき私は「同音異義語を探してください」と応えます。そうです、発音が同じで意味の違う言葉です。そういう言葉はたくさんあります。その組み合わせで、意味が懸け離れているほど笑いが生まれるのです。

とはいえ、逆にダジャレを連発する人もいます。少しうるさいですよね。くどくならないよう、「ここぞ」という時にためらわず、ポンと言うのがコツでしょうか。間を外すと効果は半減します。どうぞうるさがられない程度にダジャレを楽しんでください。